

京都市地域・多文化交流 ネットワークサロン通信

発行日 2021年3月31日 編集・発行 京都市地域・多文化交流ネットワークサロン

第36号

コロナ禍でのお別れ

新型コロナウイルス感染拡大によって、会議等が中止となり、人と会う機会が極端に減った。これまで頻繁にお会いしていた方と久しぶりに出会うと「ご無沙汰しています」「お元気ですか」とおかしな挨拶を交わすようになった。コロナ禍はお会いすることを妨げるだけでなく、亡くなられた方とお別れすることも妨げている。葬儀が、少数の近親者のみでおこなわれることが当たり前のことになってきている。

2020年4月14日に、希望の家カトリック保育園前園長の崔忠植先生が亡くなられた。在日大韓南部教会でおこなわれた葬儀に、私は参列することを許されたが、多くの方が参列することができなかつたため、礼拝堂に入りきれないほどの沢山の弔花がお見送りをすることになった。2020年5月27日には、JCLの立林己喜男さんが急逝された。ネットワークセンターでお別れ会がおこなわれ、密を避けながら多くの方が参列されたが、私は会場が込み合わないよう裏方として立林さんとお別れした。2021年2月2日には、JCL代表の矢吹文敏さんが亡くなられた。矢吹さんは、東九条春まつりの実行委員長を務めていただき、東九条春まつりを「誰も排除しない、誰も排除されないまつり」と位置づけられた。この考え方は現在も継承されている。

コロナ禍の中、ネットワークサロンの近所にお住まいの方々も沢山亡くなられたが、葬儀に参列することは叶わなかった。葬儀は、ご本人のためだけではなく、生前親しくしていた私たちがちゃんとお別れするためにあると思う。ちゃんとお別れすることは、残された私たちがこれからどのように生きていくかを整理することではないかと思う。新型コロナウイルスの恐ろしさは、これまで当たり前にしてきたちゃんとお別れすることさえも妨げられるところにある。



1984年 希望の家創業者ディフリース神父様と一緒に

前川 修（京都市地域・多文化交流ネットワークサロン）

崔忠植さんを偲んで

崔忠植さん年表

- 1938年 京都生まれ。両親は朝鮮半島の全羅南道出身。
小学生の頃から日本基督教団洛南教会、在日大韓基督教京都教会に通う。
- 1958年 京都府立大学に入学。
- 1962年 同志社大学神学部へ進学。
卒業後、韓国での生活を経て、在日韓国基督教開館（KCC）で勤務。
- 1980年 希望の家カトリック保育園園長に就任。
- 1987年 東九条キリスト者地域活動協議会（HEAT）結成。活動委員長となる。
- 1993年 第1回東九条マダン開催 初代～4回実行委員長を務める。
- 2014年 希望の家カトリック保育園園長退任 顧問となる。
- 2020年4月14日 永眠

崔忠植さんの想いで

崔さんと初めて出会ったのは、私は小学生、彼が中学生の時、洛南教会の教会学校で、とても活発な先輩でした。その頃、教会学校へ行く東九条の在日同胞の子どもたちは、中学生ころまでは洛南教会に行き、その後は西院にある在日大韓教会の京都教会へ移るのがほとんどでした。崔さんもやがて京都教会へ移られ、私が高校を卒業したころに、「君も京都教会へ来るんだ」と、強く勧められましたが、私には同じクリスチャンなのに、何故韓国の教会へ移らなければならないのか、当時の私には分かりませんでした。次に出会ったのは、私が25歳の時でした。日本人との結婚問題で悩んでいた時、崔さんも同じ体験



保育園児配食のお手伝い

をされてきたことを思い出し、当時活動しておられた大阪の基督教会館に婚約者と訪ねました。彼はとても喜んでくれましたが、日本人との結婚に対しては、素直には賛成してもらえず、厳しい前途があることを諭されました。

1980年初めころ、東九条の民族差別問題と、生活環境改善問題などで、崔さんらと数人で何回か話

し合う機会がありました。当時空席になっていた「希望の家カトリック保育園園長」に、出席者全員が崔さんを推薦し、間もなく園長に就任されみんなで喜び合いました。そして後に「多文化共生保育」を实践されました。1992年春、私は地域の仲間たちと「東九条マダンをやろう！」と呼びかけ、6月に「準備会結成」を起ち上げ、崔さんに実行委員長になって頂きました。彼は実行委員長として、地域の有力者や、教育委員会、学校長らに働きかけられましたが、92年秋開催を目指していた第1回東九条マダンは実現せず、改めて93年1月実行委員会を結成し、崔さんが初代実行委員長に就かれ93年9月の第1回から96年11月の第4回東九条マダンまで職責を果たされました。その後実行委員長は私が引継ぎ、崔さんには顧問役としていろいろ相談してきました。マダンだけでなく、地域のことなど様々な問題で支えになって頂いただけに、崔さんがおられないことは私にとって大きな空洞ができたようでとても寂しい想いです。どうか、これからも天上から私たちを見守ってください。

朴 実（東九条CANフォーラム代表）

崔園長先生ありがとう・감사합니다

「忠植園長先生の追悼文を書いてくれませんか！」と依頼され、正直すごく悩みました。34年間の園長先生の功績を限られた文字数の中には到底書き切れないし…。悩んだ末、私が園長先生と関わりを持つようになってからの事を思い出しながら、そんなに気を張らずに書いてみようと思いました（失礼かな…）。

崔園長先生が天国へ旅立たれて、早11ヶ月。いっぱいのお花に囲まれた祭壇で、にこやかに微笑みかけておられる写真を前にこの原稿を書いています。

崔忠植氏が希望の家カトリック保育園の園長として、赴任して来られたのは、1980年9月でした。当時、41才という若い園長を迎える事、そしてカトリック施設にプロテスタントの韓国人牧師を迎えるのは、今までになく異例の事でした。故村上真理雄神父様曰く、「これは、エキュメニカル」だと。

崔園長先生を迎えた数ヶ月後、保育園で差別事件が起こりました。隣の公園で遊んで



東九条春まつりにて

いた園児に向かって、その場にいた小学生のお兄ちゃんが、「おまえは、韓国人か日本人か、なに人や？」と質問しました。園児は「僕は韓国人や！」と答えると、お兄ちゃんは「朝鮮人殺したる！」と言って、その園児に向かって玩具のピストルを撃つ真似をしました。その小学生は児童館に来ている保育園の卒園児でした。この事件は保育園にとって衝撃的でした。そしてこの出来事は、今までの保育方針を見直すきっかけとなり、崔園長先生を中心に膨大な作業が始まりました。学習会や職員会議を重ね1982年4月に新たな保育方針を策定し、「共に生きる喜び」を土台とした方針としてスタートしました。地域に根差した保育園として「共に生きる喜び」を保育内容の中で実践して生かすべく、機会があるごとに学習会や話し合いを繰り返し、1993年に開催された第1回東九条マダンに参加、（参加は現在に至っています）。

2002年には京都YWCA・アプトの協力を得て「多文化共生保育」がスタートしました。そして現在「みんなちがって、みんないい。みんなちがって、みんなだいすき！」として保育園に根付いています。

1990年代、東九条地域の少子高齢化に伴い子どもの数が激減。保育園も厳しい定員割れの状況が数年間続きました。福祉事務所や当時の保育課と何回か話し合いがもたれ、1998年に山王保育所と希望の家カトリック保育園を合併する事になりましたが定員割れは解消しませんでした。「園児募集」のチラシを作って待機児童のいる地域の家庭にポスティングするなど、保育園の存続を懸けて園長・職員が一丸となって奮闘。2003年に送迎バスを発車させるなどの取組みを開始しました（現在は送迎車が3台走っています）。

当時の園長先生のご苦労は大変だったと思います。東九条で生まれ育ち、様々な朝鮮人差別を体験して来られた園長先生は、差別を受ける側のしんどさを伝えつつ、差別する側の差別を見抜く鋭さ、許さない心が育つように私達に指導して来られたように思います。長い在任期間中、何度か入退院を繰り返し、持病と戦いながら（戦うと言うよりも持病と



崔園長自筆による保育園20周年記念品

共生しながら）、飲むことが好き・食べるのが好き・人と喋ることが大好きな人でした。それらを通して人との出会いを大切にしてくられたんだと思います。私も、希望の家カトリック保育園でそんな園長先生と出会えたこと、一緒に働けたことに感謝しつつ、貴重な思い出として大切にしていきたいと思っています。2014年、8代目園長として就任された叶

園長先生へ「共に生きる喜び・多文化共生保育」の理念はしっかり引継がれ、2017年に創立50周年を迎えました。多くの卒園児が、自分の子ども達をこの保育園に入園させてくれている現実に、紆余曲折を繰り返しながら繋がってきた素晴らしさを感じます。これから先、ずっと未来まで、崔園長先生の天国からの見守りを確信しつつ、長きに亘る導きに心から感謝致します。

「ありがとうございました・감사합니다」 滝上万里江（希望の家カトリック保育園）

矢吹文敏さんを偲んで

矢吹文敏さん年表

- 1944年 山形県生まれ。骨形成不全症のため骨折が多く就学猶予免除となり、小学校4年生まで聴講生。
- 1960年前後 4、5年間寝たきり生活の中で、通信高校や点訳活動に没頭。
- 1965年 通信高校の友人と軽印刷業を始める。また、障害者仲間と山形社会保障研究会「サークルきどう」を結成。まちづくり運動を始動。
- 1987年 車いす市民全国集会で出会った長橋榮一氏が立ち上げた日本自立生活センター（JCIL）に参加するために京都へ。
- 1993年 事務所が東九条北松ノ木町に移転。同年10月、東九条マダンが始まる。
- 2012年 日本自立生活センター代表に就任。
- 2013～2017年 東九条春まつり実行委員長を務める。
- 2021年2月2日 永眠
- 「障害者権利条約の批准と完全実施をめざす京都実行委員会副実行委員長」
- 「反貧困ネットワーク京都共同代表」「二ノ丸学区自主防災会会長」他、東九条での活動に参加。

「矢吹さんと出会って」

初めての出会いは、第一回東九条マダンの実行委員会でした。当時、始まる際、地域のまつりであり、在日韓国朝鮮人、他外国人、日本人、障害者と共にと掲げ始めようとしていました。そこへ、「障害者と共にとあるが本当に障害者の事を知っているのか」と問わ



第1回東九条マダンの頃の矢吹さん(中央)と筆者(左)

れたのが矢吹さんでした。今思えばたくさん
の問題を抱えながらマダンを始めた記憶があ
り、地域のまつりとは何か、多くあった在日
韓国朝鮮人の団体の参加要請など大変な時期
でした。その中でも「障害者と共に」とある
が、現状を知らなかった自分に気づいた事が
大きな問題で、自分はどう向き合うのか、何
をすればいいのか考えさせられました。マダ

ンの取り組みとして、まずは交流会をしようと矢吹さんたちから提案があり、行われまし
た。「本当に障害者のことを知っているのか」今もその言葉を忘れていません。何も知ら
なかった自分がいて知るきっかけになったからです。それから障害者の方々の介助や手伝
いに行く等、行動を共にする事が多くなり、ここでも気づかされる事がたくさんありまし
た。その中でも、車いすでの移動は大変だと思う事がいくつもありました。普通に道路を
通行するのも少しの段差で引っかかってしまい、道路がかまぼこ状になっており、まっす
ぐ進むのも困難でした。また当時、京都駅では荷物用エレベータしかなく、わざわざ遠回
りをしなくてはならず、現実を目の当たりにしました。これはごく一部ですが、本当に
生きにくい世の中だと感じました。目線をどこに置くかで、問題点や生き方が変わり、自
分たちが大丈夫でも困る人がいるという事や、まあ良いだろうと妥協しても当事者は一切
の妥協も出来ないし、許してしまえば生きる環境が変わらなくなり住み良くなるはならないの
です。自分は甘いをつくづく思います。でも、行動を共にする事で、周りの人から困った



東九条春まつり実行委員長あいさつ

時に声を掛けてもらったり、小さな思いやり
を温かく感じたりしたこともありました。自
分自身いろいろな経験をさせてもらいました。
矢吹さんは、自分自身の問題に、正面から向
き合い闘い続けてこられたのだと思います。
生活に関わる問題ですが、意見しないと気づ
かない自分のような人もいるかもしれません。
まだまだ生きにくい世の中なので、これから

も矢吹さんの言葉を思い出し、もっと知り、行動して行きたいと思います。

矢吹さん気づかせてくれて、ありがとうございます。

陳 太一（東九条マダン）

矢吹さんとの思いで

2月2日に一通のメールが届きました。矢吹さんがお亡くなりになられたとのことでした。あまりにびっくりして、なんと返信してよいのかわからないままに時間だけが過ぎていきました。矢吹さんと京都ダルクの出会い、東九条春祭り実行委員会からだったと思います。その後、向島での京都ダルク・グループホーム建設反対があり、親身になってくださったのがきっかけでした。最初の向島での地域説明会でボコボコにされ落ち込んでいた週末に、東九条春まつりに参加させていただき、とても気持ちが楽になったことを今でも覚えています。その後、向島での「にじいろプロジェクト」



や「防災ネットワーク」などいろいろなところで顔を合わすようになりました。お会いした時にはいつもダルクの建設の事を気にして、声を掛けてくださいました。矢吹さんは熱心に僕たちの事を気に掛けてくださり、本当に勇気づけられました。その後もJCILのメンバーさんが、矢吹さんの地元山形名物の「芋煮会」に誘ってくださり、交流の場を作ってくださいました。残念なことに矢吹さんはその時、体調を崩され入院されていたのでお会いすることが出来ず、その場を一緒に過ごすことはできませんでした。昨年9月に京都ダルクのグループホームが完成した時には本当に喜んでくださいました。ホームのお披露目会にお声を掛けさせていただきましたが、その時も体調を崩されていて来てくださることができませんでした。コロナが落ち着いたら改めてお声掛けさせていただこうと思っていた矢先にお亡くなりになられ、大変残念に思っております。

困っている方に目を向けご尽力されていたお姿、自分たちにはいつも笑顔で接していただいた事に感謝の気持ちしかありません。

これからも天国で僕たちの事を見守っていてください。さようなら。

太田実男（京都DARC共同施設長）

追悼文

「出自、民族がゆえ、差別を受けてきた地域に、障害者が混ざったらどうなるか」日本自立生活センター（JCL）の事務所を東九条に構えたのは、生身の「実験」だったと矢吹さんはときおり回想していた。実験結果の検証は、じっくり聞けず仕舞いだった。聞く覚悟ができていないか自問しているうちに逝ってしまわれたのだ。「他の地域より障害者が居やすい地域に違いないよ」と話されているのを横で聞いていたこともある。その向こう側の話をできなかったことが悔やまれる。

矢吹さんは「まちづくり」に使命感をみせていた。まちづくりに「参加している」ことにこだわっていたとも思う。ある日、変わりゆく東九条に何をつくるか話していたとき、「世界一大きな砂時計」と言い、「ピラミッド型の建築物の外回りに回遊型スロープをつくれば、上層階に避難できる防災施設ができる、半径300mくらいかな」と言って見せた。有用／無用の物差しをユーモアをもって問い直し、こどもたちがはしゃぎそうなアイデアを披露する姿は、「人間、矢吹」の真骨頂だった。「無用性」のなかから価値を掘り出すことの喜びを教示されたと唸った。わたしが健常者の「有用性」に縛られていることを突かれて不思議と心地よさを感じた。

わたしの職場「エルファ」は一時期JCLと隣接していた。矢吹さんの言う実験の「被験者」でもあり、ひょっとしたら「共同研究者」にもなりえたが、現状そうになっているとは言いがたい。まちづくりの主体者は恐ろしいほどに多様だ。常につながりあえている必要もないとは思いますが、他者の意思を尊重する関係性を維持するのも課題が山積だ。出資者やら、開発業者やら、行政やらが、控えめな言葉を添えて事業をぐいと推し進めていくなか、いまという瞬間をともに生きるひとりの人として、矢吹流まちづくりの実像がどこにあったのかを模索し、軽やかに進んでいきたいと思う。

さとう大（NPO法人エルファ職員）

編集・発行 京都市地域・多文化交流ネットワークサロン

□所在地：601-8006 京都市南区東九条東岩本町31

□tel：075-671-0108 □fax：075-691-7471

□開館時間：9時～17時 □E-mail：info@kyotonetworksalon.jp

□webサイト：http://www.kyotonetworksalon.jp

□JR京都駅八条口・JR京阪東福寺・市営地下鉄九条駅より徒歩15分

□京都市バス202・207・208系統 九条河原町より徒歩10分

16・84系統 河原町東寺道より 徒歩1分
